

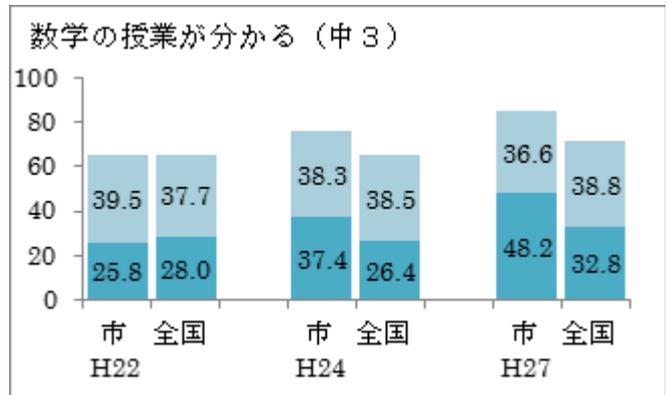
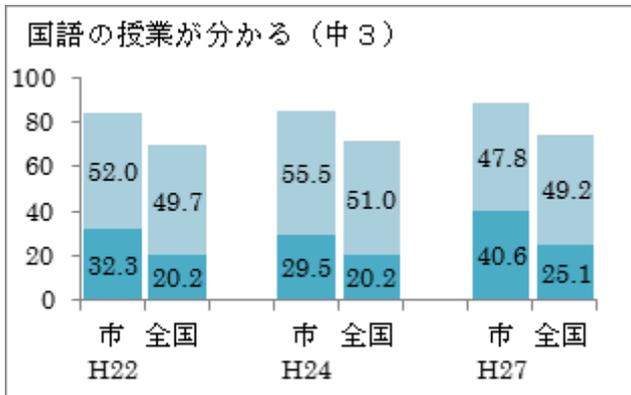
全国学テ調査結果から見える “子どもの姿、おおだて型学力を育成する授業”

大館市全体では、小学校の安定した学力、そして、昨年に引き続き、中学校の伸びには目を見はるものがあります。長年取り組んできた小・中学校の連携、そして、第8次学力向上に係る授業改善、ふるさとキャリア教育の成果が数値のみならず質問紙や学校訪問での子どもたちの姿からも見えてきます。とりもなおさず、全国トップレベルの学力は、先生方の優れた授業力と、教材研究の深さによるところです。

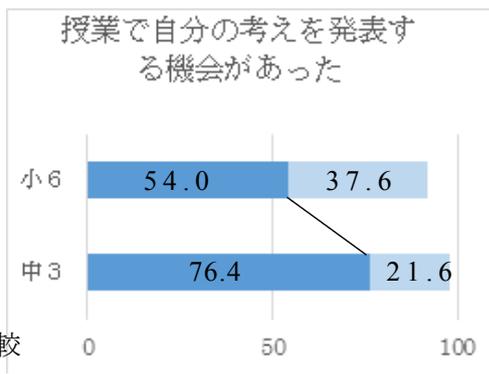
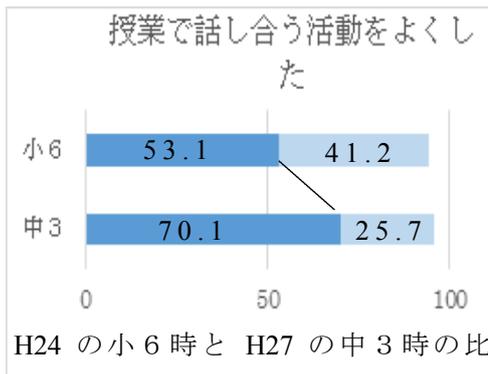
これまでも言われてきたように、すべての基盤となる規則正しい生活リズム（早寝早起き・朝ご飯）、スマホやゲーム時間が少ないことなどは、今年も全国そして秋田県平均よりさらに望ましい状況にあります。

*グラフは、児童生徒質問紙、または学校質問紙
下「よく行っている」上「どちらかと言えば行っている」

1 「分かる・できる」授業から、次のステップへ～授業改善が進む～



小学校6年生においては、「授業が分かる」と答える子どもは3教科とも9割を越えています。中学3年生でも、「授業が分かる」と感じている割合は、上のグラフでも分かるとおり年々増加しており、「分かる・できる授業」への取組の成果と言えます

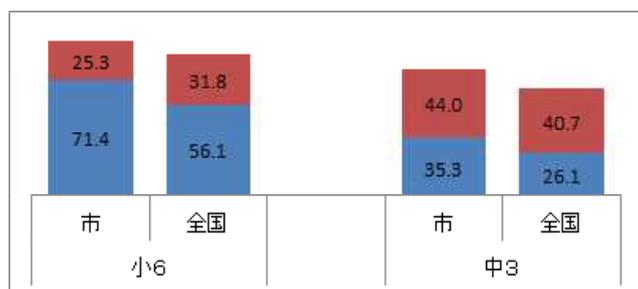


現在の中学3年生は、小学生の時よりも、中学1・2年生で「話し合う」「発表する」授業が行われ、中学校での授業改善が一層進んでいることが分かります。

2 意外に理系は強い！～科学の目の育ち～

理科離れが全国的な課題となっていますが、大館市の場合には、「理科が好き」と答える割合は小・中学校とも9割前後であり、3年前の調査同様に、理科に親しみを持っていることが分かります。特に、小学校6年生で「理科が分かる」と答えている子どもが97%にも達していることはすごいことです。小学6年生では理科・科学系の仕事につきたいと思う割合も、全国より7ポイント高くなっています。理科に関する質問項目すべてにおいて全国よりも高い割合になっています。中でも特徴的なのが、「自然の中での遊びや観察の体験」が多いこと、「理科室で週1回は観察や実験を行っている」は全国よりも25ポイントも高く、理科教育の充実がうかがえます。このことが「実験・観察が好き」と答える子どもが小学校で96%、中学校で89%という結果につながっています。

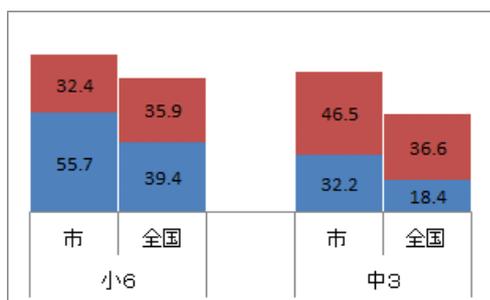
授業以外にも、今年は、全国ロボットコンテスト（WRO JAPAN 2015）において、大館市の釈迦内小・長木小チームが職能短大の先生方のご指導のもと、満点で全国優勝という快挙を成し遂げました。三菱重工のロケット教室など最先端の科学に触れる機会も、子どもたちの理科への興味や関心につながっているのではないかと思います。



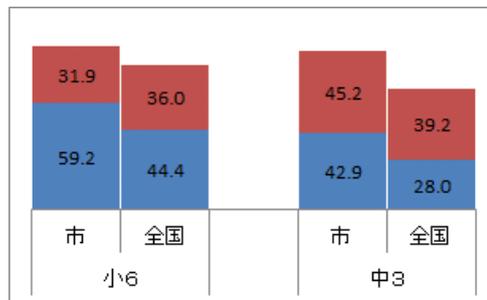
理科の授業が分かる（H27）



観察や実験が好き（H27）



自分の予想をもとに、観察や実験の計画を立てている（H27）

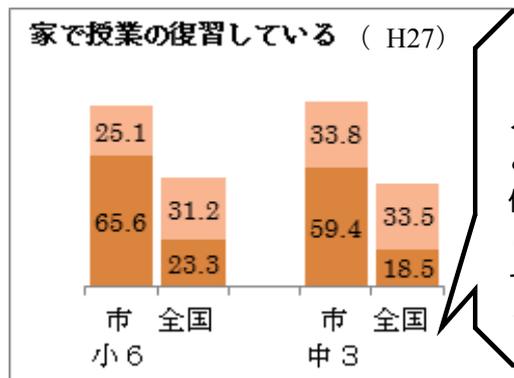
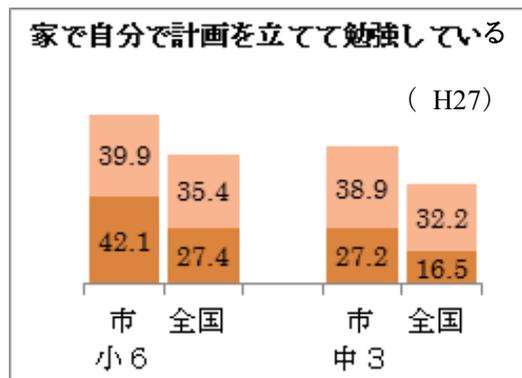


観察や実験の結果をもとに考察している（H27）

3 子どもが主体的に学び、生活する姿

秋田県の子どもの家庭学習の定着は、全国的に注目されていますが、そこに至るまでは、先生方が職員全員で共通理解の上で、家庭学習の指導をし、提出後の評価に力を入れていることが学校質問紙から分かります。学習時間は全国より少ない傾向ではありますが、学習塾での学習時間がほとんど無いことに関係があるかもしれません。

学校での生活では、中学3年生が「決まりをみんなで話し合って決めている」という割合が高く、子どもたちが主体的に生活している様子が見えます。

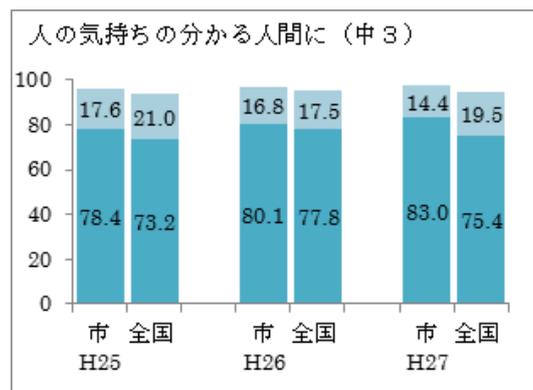
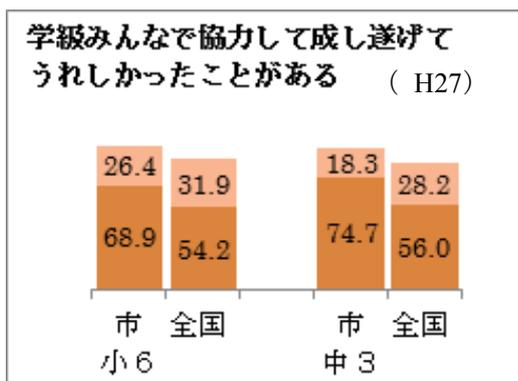


他県から「家庭学習のノート予算は？」と聞かれます。何か特別な魔法のノートを使っていると思われるようで・・・

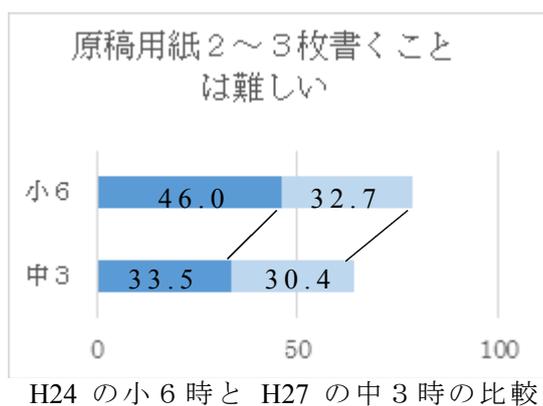
4 授業を通して育てているチームワーク、学級集団

おおだて型学力では、集団での磨き合い、学び合いを通して、「集団で生活することの良さ」に気づき、仲間と共に成長しようとする姿勢を育成したいと考えています。実は、これは秋田県が以前から、教科指導だけではなく、特別活動を大事にしてきた成果が根付いているとも言えます。

児童生徒質問紙では、「分からない問題は、友達に尋ねる」「友達の話最後まで聞く」という割合は全国よりも高く、友達とのよい関係性の中で学び、生活していることが分かります。



5 長文を書くことの苦手意識から脱却



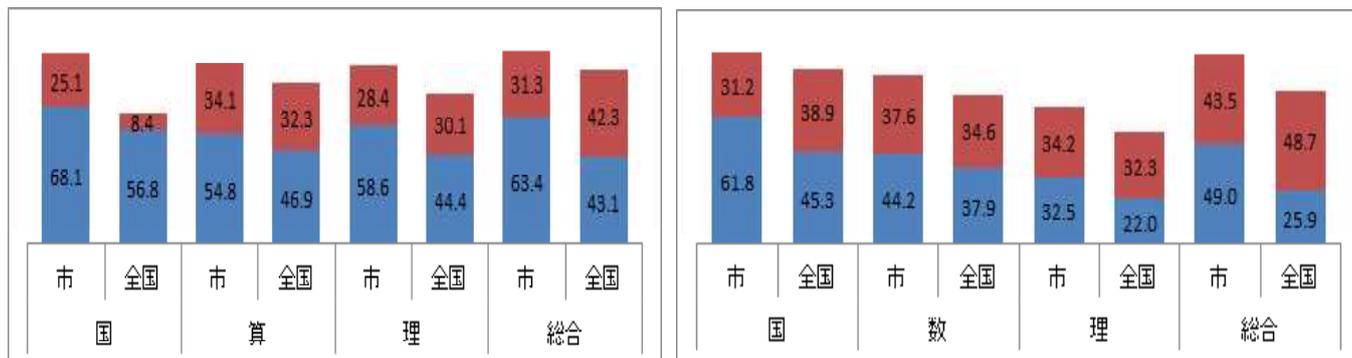
児童生徒質問紙では、原稿用紙に長文でまとめることの苦手意識がここ数年、見られていました。

今年は、小・中とも全国平均並みに回復しています。現在の中学3年生を見ると、小学校6年生の時よりも改善傾向が見られます。その背景として、先生たちが授業やコラム学習を通して書くことの指導に力を入れ、特に書く習慣が身に付く指導をしていることが挙げられます。

6 学びの目的意識の高まり～学習が生活や将来に結びつくと考えている

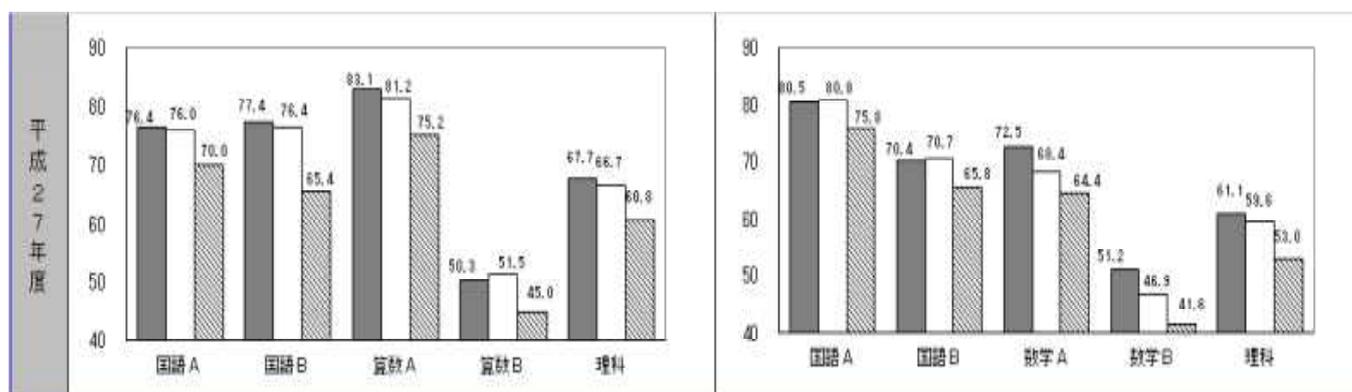
年々、中学校3年生が目的意識をもって学習に向かっていることが分かります。全国学力テストで教科の問題を解くときに「最後まで解こうと努力した」、「ものごとを最後までやり遂げて嬉しかったことがある」と答える中学3年生が小学6年生時よりも割合が高いことから、難しいことでも一生懸命に取り組む気持ちが育ってきています。同様

に、教科の学習が「分かる」「好き」に加えて「学習したことを生活の中で活用できないか考えている」、「教科の学習は大切だ」と感じている子どもが多く、日頃の授業への真剣な参加態度につながっていると言えます。



各教科の学習は、将来社会に出たときに役立つと思う (H27・左：小学校、右：中学校)

◆参考資料 平成27年度 全国学力・学習状況調査



小学校	国語A	国語B	算数A	算数B	理科
大館市	76.4	77.4	83.1	50.3	67.7
秋田県	76	76.4	81.2	51.5	66.7
全国	70	65.4	75.2	45	60.8
県比	100.5	101.3	102.3	97.6	101.4
国比	109.1	118.3	110.5	111.8	112.2

中学校	国語A	国語B	数学A	数学B	理科
大館市	80.5	70.4	72.5	51.2	61.1
秋田県	80.8	70.7	68.4	46.9	59.6
全国	75.8	65.8	64.4	41.6	53
県比	99.6	99.5	105.9	109.1	102.5
国比	106.2	106.9	112.5	123	115

子どもハローワーク 「第46回博報賞」受賞！

子どもたちの参加、学校のご協力に感謝

今年度は、全国から81件の応募の中から個人・団体合わせて16の教育実践が選ばれています。

平成24年にスタートした子どもハローワークは、働く体験を通して子どもたちの職業選択の幅を広げるとともに、地域を支えていこうとする気概を育む実践であることを評価いただき、教育活性化部門を受賞しました。

本賞は、「国語・日本語教育部門」「特別支援教育部門」「日本文化理解教育部門」「国際文化理解教育部門」「教育活性化部門」からなっています。ぜひ、各校または個人の実践を応募いただければと思います。



11月6日 都内にて
(日本工業倶楽部)
推薦者である北教育事務所の
柏崎主任社会教育主事と

